

言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 木村 護郎クリストフ
論 文 題 目 少数言語の維持・復興における「人為性」
ーカトリック地域のソルブ語を中心にー
論文指導委員 糟谷 啓介 教授
学位取得年月日 2002年 3月 28日

本論文は、少数言語の事例研究をとおして、社会制度としての言語がいかにして構築されているかを考察しようとするものである。その構築過程における「人為性」の諸相を明らかにすることによって、人間から切り離さずに社会の中の言語固有の存在次元を把握することをめざす社会言語学の歩みを進めるのが本論文の目的だ。

本論文は大きく3つの段階からなっている。まず問題の場を提示し、理論的検討に基づいて本論文の視座を定める（第一部）。次に、第一部で示された仮説的な理論枠組みに沿って事例研究を行う（第二部、第三部）。第二部と第三部は同様の構成を持っており、第二部で試された方法が第三部でより詳細に展開される。そして事例研究をふまえて理論枠組みを再検討するのが第3段階である（第四部）。各部の要旨は以下のとおりである。

第一部 本論文の視座

第1章では本論文の問題意識を明らかにし、目的と手順を示した。

より強力な言語によってその使用が相対的に制限された状態にある「少数言語」の維持・取り替えに関してしばしば「自然」と「人為」という二分法的な理解の仕方がみられる。本章では、そのような理解の仕方が、少数言語の事象をこえて根底的な言語観に関わることに注目した。少数言語の衰退を「自然」とみなし、少数言語の維持・復興運動などを「不自然」とみなす言語観は、それ自体が言語維持を阻み、言語復興を不可能なものとして立ちあらわせる一因であるのみならず、一般的な言語理解としても根本的な問題をはらんでいる。その問題は、言語を物象化し、また言語生活の中での意識性を周辺化するという2点においてみいだされた。本章では、言語現象がそもそも人間が意識して働きかけることを含んでなりたっているのではないかということ提起する。そして、このような問題認識から、言語事象の本質的な要素として①意識性、②働きかけの二つの要素からなる「人為性」を定義し、「人為性」に関する社会言語学の認識論の検証を試みた。明白な意図性を含めて人間が言語に向き合う諸相を広く研究課題としてきた社会言語学も、「言語態度」と「言語計画」という研究枠組みに代表されるような「人為性」に関する二分法的なアプローチによって、結果的に、「自然」と「人為」という二元論的な言語観をより洗練された形で踏襲していることが指摘された。

すべて人間の社会的な営みである言語活動を事実上「自然」と「人為」に分ける不毛な二分法

を克服するための一つの試みとして、本章は、少数言語をめぐる動きを従来とは正反対の視点から再検討する方針を打ち出す。すなわち、所与の言語を（なるべく）無意識に使用するものとして想定される「自然な」言語使用を暗黙のうちに基準にして言語復興をみるのではなく、逆に、「人為性」が先鋭に現れる言語復興運動から出発して「自然」に使用されるかにみえる少数言語の言語活動をみなおすことをめざすのだ。これは、言語を自然視する傾向に対して言語はすべて人間が明確な目的を持って意図的につくりあげているという逆の極端を主張するためではなく、言語は人間の言語活動の産物に他ならないという原点に戻るためである。そして、少数言語の事例の考察をとおして、日常的な言語活動から言語復興運動まで、さまざまな度合いの意識性を含む「人為性」を言語現象の本質的な要素として扱う言語活動の理論的枠組みを提示することが本論文の目的としてあげられる。「人為性」を統合的に把握する枠組みは、少数言語の維持・復興をめぐる論議のみならず、人間の言語活動の全般的な理解に資すると考える。また言語維持・取り替え研究の文脈では、本論文は、言語維持・復興に焦点をあてることによって、言語取り替えや同化により注意を向けてきた研究動向の穴を埋める一石として位置づけられる。

事例としては、限られた、しかし「人為性」に関して対照的な典型をなす少数言語が選定された。第一に、イギリス南西部のケルト系の言語ケルノウ（コーンウォール）語（話者数、数百人）をとりあげる（第二部）。ケルノウ語は、いったん母語話者を失った後に復興運動が起こり、完全に意図的な言語復興運動によってなりたっている点で「人為性」の極例をなす。その「人為性」の特徴を明らかにした上で、ドイツ東部のウジツァ（ラウジッツ）地方を中心とする西スラヴ系の言語ソルブ語が現在まで地域共同体の日常言語として使われているカトリック・ソルブ地域（ソルブ語話者1万5千人弱）について考察を進める（第三部）。ソルブ語は圧倒的に優勢な言語に囲まれた地域固有の少数言語としての基本的条件をケルノウ語と同じくしているが、「人為性」に関して大きく異なっている。カトリック地域のソルブ語は、既存の言語が日常生活で「自然に」使用され（なくなっ）ていくかにみえる多くの少数言語を代表する試験例として適していると考えられる。人間が意図的に言語を構築しようとしているケルノウ語の事例を手がかりにして言語が所与の存在にみえるカトリック地域のソルブ語の「人為性」をとらえるのが本論文の事例研究の中心となる。扱う時期は現代が中心となるが、現在を理解するための方途として、ケルノウ語については復興運動の始まる20世紀初頭まで、ソルブ語については、現在まで続く制度的・社会的な条件が形成されるドイツ民主共和国（以下DDR）時代まで必要に応じて溯る。

第2章では、「自然」と「人為」に関する二分法を取り払って「人為性」を言語現象に不可避の構成要素として包括的に組み込む理論的方向性を検討する。そのために、言語への意識的な介入を有機的に含み、かつ個別の状況・パターンをこえた理論的な枠組みを提供する観点を取りあげる。主にとりあげるのは「言語的衛生」、「言語管理」および「言語イデオロギー」である。「人為性」の把握に関する各概念の意義と限界を吟味する中から本論文における理論的出発点が定められた。本論文では実際の言語使用については、言語使用によって言語がつくられる側面を反映する枠組みをつくるために、持続、反復される言語使用の積み重ね、すなわち堆積の過程として言語を捉えることを試みる。さらに、ある程度持続的な体系としての言語イデオロギーの存在を、

言語使用に必然的に伴うメタ言語活動の次元で仮定する。また、言語の一体性をつくるのは言語「内的」な体系ではないという知見をふまえて、考察の単位を、話し手によって一体の言語として意識される言語事象とした。

第二部 ケルノウ語の復興

第3章では、言語運動によってなりたつ言語であるケルノウ語の構築過程を考察することをとおして、言語使用の堆積および言語イデオロギーという概念の内容をつめて、ソルブ語を考察する足がかりをつくることをめざした。

第1節でははじめにケルノウ語の衰退と再生の概要を言語コーパス面と社会的側面をあわせて把握した。次に、言語復興に関する先行研究を検討するとともに本研究の方法を示した。言語使用について、先行研究はケルノウ語の使用される場をあげるものの、具体的な言語使用の場の分析は依然として皆無である。そこで本論文では、典型的なケルノウ語使用の場への集中的な参与観察を行い、言語復興の実際の到達度について検討した。メタ言語的側面については、言語復興のイデオロギーを主題としてとりあげた研究もなされているが、それらは言語復興運動と地域主義運動との関係のみ、しかも地域主義の視点から扱うにとどまっており、言語復興の進展をもたらした言語イデオロギーは不明瞭なままである。そこで、言語運動の文献調査や言語運動家へのインタビューに基づいて論を展開する本論文が、言語復興を支える言語イデオロギーに直接焦点をあてた最初のものとなる。

第2節では、ケルノウ語使用の諸相を整理し、言語使用の諸形態の成立について時代を遡って考究するとともにそれらの諸形態の担い手の現時点での広がりを検討した。こうして単語レベルの使用、文レベルでの形式的・儀礼的な使用、言語学習、教材依存の口頭表現や作文、文芸などの創造的使用、さらに家庭における日常的な使用まで、ケルノウ語使用の諸形態が特定され、ケルノウ語はこれらの言語使用形態の集合として把握された。しかしこれらの言語使用の諸形態は単に併存するのではなく、ひとつの言語使用の段階が次の段階へ漸次的に移行する連続体としてとらえられた。この連続体がケルノウ語の言語使用の堆積をなしているといえよう。各段階の推定参加者数を考えあわせると、単語レベルの基礎的なケルノウ語使用がもっとも広範に行われ、ケルノウ語使用者の範囲は段階が上がるほど大きく減少し、日常的に使用する人に至ってはほんの一握りである。このような現在のケルノウ語使用の堆積は、積み重ねの順序（質的側面）を高さとして、その言語使用形態の広がり（量的側面）を幅として表すことによって、すそ野が広く上にいくほど狭くなる山型の概念図として図式化された。

つづいて第3節では、ケルノウ語復興に関してどのような言語イデオロギーが見出されるかを検討した。言語復興運動の初期に、ケルノウ語はケルト復興を主要な契機とする地域主義運動の要として位置づけられ、イングランドの他地方とは異なる地域としてのコーンウォール地域意識の生成・発展のいわばイデオロギー的な「触媒」としての役割を果たした。先行研究では、その後、地域主義の課題の拡散によって、20世紀後半以降、ケルノウ語は地域主義の中心的な課題としての地位を失い、「周辺化」、「脱政治化」していったとされている。しかし言語イデオロギ

一の視点から再検討を加えることによって、現在も言語運動の言説においては言語復興が地域主義の中心的課題でありつづけているのみならず、言語復興を支える言語イデオロギーが知識人のユートピア的色彩の濃いケルト復興運動の範囲をこえてコーンウォール住民の地域意識の中により広く浸透したことが示された。また、言語復興自体が政治課題であることをこえて、ケルノウ語が他の政治的・社会的課題の実現のための道具として新たなイデオロギー的位置づけを獲得しつつある傾向が確認された。ケルノウ語復興は確かに地域主義の主要な課題ではなくなったが、コーンウォールの「独自性」を最も明確に体现するとされるケルノウ語は「周辺化」、「脱政治化」したのではなく、地域意識の要素の一つとして、また地域の政治的・社会的課題に対処するために、ユニークな「資源」として新たにとらえられるようになっていることを明らかにした。

第4節ではこれまで個別に考察してきた言語使用の堆積と言語イデオロギーの関係を考察し、ケルノウ語復興という現象を言語活動として全体的にとらえなおした。言語使用と言語イデオロギーの歴史的展開を見比べると、相互作用によって発展してきたことが明らかになる。言語使用の堆積と言語イデオロギーをあわせてケルノウ語復興という現象をとらえる必要性が提起される。

第三部 事例研究 — カトリック地域のソルブ語

ケルノウ語においては言語使用の堆積と言語イデオロギーの相互作用による言語の構築がみられたが、ソルブ語の場合、このように「人為的」に言語が構築されているといえるのだろうか。第三部では、段階的に堆積する言語使用、意図的な言語イデオロギーの存在、そしてそれらの相互作用による「言語」の社会的構築というケルノウ語のあり方をもとにソルブ語について考察を進めた。第4章では、対象地域の概要を把握し、先行研究を検討した。ひきつづき第5章ではソルブ語を言語使用の諸形態の堆積としてとらえることを試み、第6章ではソルブ語に関わる言語イデオロギーを検討し、堆積との相互関係についても考察した。そして第7章で、先立つ2つの章で個別に扱った言語使用とメタ言語活動を具体的な時空で統合的に考察し、ソルブ語が社会的に構築されるさまを言語活動の現場で明らかにした。

第4章では、ソルブ語の使用される地域の中から本研究の対象となるカトリック地域を1つの地域として取り出す根拠を示した後、先行研究および本研究のための調査について述べた。まず、カトリック・ソルブ地域の社会状況を考察し、この地域が言語的、宗教的観点から周囲と明確に区別されることを、歴史的経緯を追うとともに統計資料を用いて示した。次に、カトリック・ソルブ地域における言語活動に関する先行研究を概観した。カトリック地域のソルブ語使用の全体像を示す研究がないということとともに、カトリック・ソルブ地域最大の組織である教会の働きがみえないことが先行研究の欠として浮かび上がった。先行研究はいずれも、地域における教会の役割の重要性を指し示すが、教会の働きを直接とりあげていないのである。そこで、本研究においては、カトリック・ソルブ地域における言語活動の全般的把握とともに、教会の働き、とりわけ教会におけるソルブ語の理念的な位置づけおよび言語使用のあり方が主要な調査課題となっ

た。

第5章では先行研究および現地調査資料に基づいて、ソルブ語の使用形態について検討した。復興ケルノウ語と異なり、ソルブ語では、言語使用の通時的な出発点が措定できるわけではなく、積みあがる過程がケルノウ語ほど明白に通時的にあとづけられない。しかしソルブ語も、言語使用としてみると、特定の特徴を持った言語使用形態の持続・反復によってなりたっており、一つの段階が次につながる言語使用の諸段階が示された。

地域社会で生活言語として継承されているソルブ語の場合、世代ごとによる話者の再生産がさまざまな言語使用の前提である。まず言語習得・学習段階が堆積のはじめに来るといえよう。家庭での習得が中心だが、幼稚園における言語習得の開始・継続・発展という、DDR時代に加わった新しい可能性についても考察した。学校教育では、ソルブ語で授業を行うA学級とドイツ語で授業を行いソルブ語を授業科目とするB学級からなるソルブ学校が設けられた。こうして、家庭でソルブ語を習得している子どものみならず、家庭でドイツ語を話す子どもも、ソルブ学校のあるカトリック・ソルブ地域の場合、地域外の学校に通わせない限り、原則としてソルブ語を学んでいる。しかしソルブ語使用の主要な担い手はA学級の出身者とされる。授業目標や学習達成度の検討から、B学級では大方が学習段階をこえて日常的な言語使用に至るほどの言語能力を身につけるに至らないことが確かめられた。

言語学習を前提としてその上に成り立つのが言語使用段階である。家庭・近隣での使用など、日常生活での私的な使用が言語習得の延長線上にある第一の段階だといえよう。しかし通常、ドイツ語話者がいるとドイツ語が使用されるため、地域においてソルブ語話者が多数派であることはソルブ語使用の十分条件ではない。相手がソルブ語を理解する場合でもソルブ語話者とドイツ語話者の会話はドイツ語になる。よってソルブ語の使用は潜在的な可能性に比べてかなり少なくなっている。このことは、私的な領域をこえて、ドイツ語話者とソルブ語話者が混じることが増える公的な場へ行くほどソルブ語使用が積みあがりにくいということでもある。私的な領域をどれだけ越えて半公的・公的な場に積みあがっていくかということがソルブ語使用の堆積の焦点として示された。

半公的な場では、居住地と職場の分離によって総じて職業生活の場はドイツ語化する傾向が強まったこと、また文化、芸術その他の趣味などの組織や団体、協会については、「ソルブ」と銘打った、すなわちソルブ（語話者）が構成者の単位となっている団体以外はドイツ語話者も所属している限りソルブ語はほとんど使われないことを考察した。官公庁、法廷、議会など、ソルブ語使用が法的に認可されてはいるが任意であるような状況的な公的使用でも、とりわけ口頭使用でソルブ語使用が希薄である。反面、書記使用の面では、出版は盛んである。ソルブ語出版の点数、内訳や受容について検討した。

公的な場ではさらに、地域におけるソルブ語の以上のような状況的な使用を前提（根拠）にしてソルブ語の使用が制度化されている場がある。制度的なソルブ語使用は、特定の文言によらない自由な（創造的）使用と、定型の文言による形式的使用に分けられる。創造的使用として学校の授業用言語としての使用、ミサの説教、ラジオ、テレビ、定期刊行物、また形式的なソルブ語使

用としてミサの典礼などにおける定型の文言の儀礼的使用をとりあげ、それぞれの言語使用の特徴と意義および参加者の範囲（新聞・雑誌の場合は部数）を検討した。

最後に、ソルブ語使用の総体の上に位置する言語使用として、実質的な内容よりもソルブ語が使用されること自体に意味が見出される象徴的使用をあげた。これはソルブ語話者を尊重する意思の表現ないしソルブ語使用者の便宜に応えるためのものであり、ソルブ語話者によるソルブ語使用を前提にしてなりたっている。口頭使用については、ローマ教皇のソルブ語による定例のあいさつのような特筆すべき例(外)があるが、象徴的使用は書かれるソルブ語の方が多い。ソルブ語の可視化の上で大きな役割を果たしてきたのが公共機関や地名や道路名の二言語表記だ。法制面の整備状況を含めて考察した。

以上の、言語習得・学習から日常的使用、半公的・公的な状況的使用、さらに制度的、象徴的使用に至る各言語使用段階については、言語学習の機会が保証されている反面、実際の言語使用については日常生活から公的領域にかけて参加者の数縮小がみられる。そのなかで、多くの参加者を得て公的領域で目立った堆積を示している場として、民族関連の組織や施設、政府の管轄下に属する学校教育や公共機関（ただし後者は象徴的使用のみ）、また特に教会関連の場があげられた。ケルノウ語の場合と同様、言語使用の形態という質的側面を高さ、各段階の参加者数という量的側面を幅にとり、ソルブ語使用の堆積を概念図として表した。ソルブ語使用の堆積においてとりわけ教会の制度的な言語使用が公的な場でのソルブ語使用への参加者の範囲について突出していることが示された。

第6章では、ソルブ語の新聞・雑誌記事や政府機関・各種団体の文献資料、現地調査記録などをもとに、直接・間接的に言語に関してなされた言及を軸にして、いかなる背景からいかなる言語イデオロギーが生じ、ソルブ語使用に対していかなる実効性を持ちえたかを検討した。はじめに、ソルブ語話者とドイツ語話者との接触場面ではソルブ語話者の使用言語がドイツ語になるといふ、ソルブ語使用の堆積を大きく制限する原理を考察し、そこにはどのような言語イデオロギーがみられるかを明らかにした。その上で、ソルブ語使用の顕著な堆積がみられた民族団体、政府関連施設、教会に注目し、それぞれについて、ソルブ語に積極的な価値づけをしてその使用を促す言語イデオロギーを考察した。

この考察をとおして、ソルブ語の衰退は決して必然的な「自然」なものではなく、またその維持は惰性によるものではないことが示された。ドイツ語話者のいるところではドイツ語を使用するという傾向は、一見、意思疎通の目的に適った実用的な選択に見えるが、ドイツ語への同化を正当化する諸概念を備えた強力な順応主義的な言語イデオロギーが特定された。またソルブ語使用の堆積の場にも、堆積が顕著になされる場ほど、強くソルブ語使用を促す言語イデオロギーがみいだされた。

ソルブ語の場合、言語を民族の要とする民族語イデオロギーが、ソルブ語の使用を促す価値づけに通低する、いわばソルブ語の基幹イデオロギーとなっている。以下でとりあげたソルブ語を価値づける言語イデオロギーはいずれもこの基幹イデオロギーを何らかの形でとりこんでいる。

言語を民族の要とする観点にもとづいてソルブ語を価値づけ、その保持をはかるのが民族運動

である。弁別的特徴が言語に集中するソルブの場合、民族運動においては言語が民族の核価値として、活動の中心的課題となっている。しかし前章で考察した堆積をみるかぎり、民族運動の言語イデオロギーが言語使用の堆積に影響を及ぼすのは民族運動の会合などにとどまるようだ。その理由の一端として、「民族」と「言語」の間の閉鎖的な回路を循環して抽象概念としての「民族」によってのみ言語使用を動機づける民族運動の言語イデオロギーの実効性の弱さを考察し、民族運動にとっての言語の意味の大きさと、一般的な言語使用に関する民族運動の影響の小ささは表裏一体であることを指摘した。

つづいて政府の政策について検討した。カトリック地域が位置するザクセン州の現在のソルブ語政策はDDR時代を大筋において継承したものである。学校制度におけるソルブ語教育やソルブ語の表記などの推進の動機づけを考えるためにはDDR政府の言語イデオロギーまで遡る必要がある。はじめにDDR政府の言語イデオロギーの基本的な特徴を確認してから時代による変遷などをより分化した形で検討した。「マルクス＝レーニン主義民族政策」としてソルブ語を促進したDDR政府によるソルブ語の政策的位置づけは、ソルブ語の促進をうたう点で言語イデオロギー的には順応主義よりも民族運動のイデオロギーに近い。しかし民族運動との表面的な調和の裏のイデオロギー的基盤が異なることが示される。民族運動にとっては、民族の存続のために言語の促進自体が目的となるが、「マルクス・レーニン主義民族政策」においては社会主義体制の護持・推進が目標であり、言語はそのための一つの手段という位置づけであった。このような動機づけは、社会情勢の変化に伴って、1960年代初頭に、政府によるソルブ語促進の範囲に変化をもたらした。A学級の授業用言語のドイツ語化やソルブ語学習に関する「自由意志」といった論点をめぐって行われた議論の分析などをとおして、一貫してソルブ語促進を掲げた政府の言語イデオロギー的前提が、事実上、公的な場でもソルブ語の使用を積極的に進めようとするソルブ民族運動の言語イデオロギーから、ドイツ語の使用を当然とする順応主義的なイデオロギーに移行したことが明らかにされた。政策の転換以降、DDR政府によってソルブ語に具体的な役割が想定されることはなかった。よって、ソルブ学校などの制度的枠組みやソルブ語表記などの象徴的使用は維持されたが、ソルブ語の実質的使用の促進は形骸化していったのである。公的な場での状況的なソルブ語使用の希薄化はこのような、ソルブ政策の言語イデオロギー的前提の変化とも対応している。

先行研究が手薄な教会の言語イデオロギーの特徴については、カトリック教会の一般的な言語使用の原則やソルブ民族運動の言語イデオロギーとも比較しつつ、特に詳細に分析を加えた。宗教共同体の多数派をソルブ語の言語共同体の構成員が占め、カトリック・ソルブの教会が言語共同体の連帯感の醸成、また風習や衣装など言語以外の「民族的独自性」の保持をもたらす要因になっていることを背景に、カトリック・ソルブの教会の指導的立場にある人々は「民族」の存続を課題とし、周囲の「ドイツ人」との差異をただ保つのみならず新たに創り出そうとさえしていることが示された。教会は宗教組織であると同時に、事実上、民族団体としても機能している。そのような教会の立場が、地域においてドイツ人住民が増える1945年以降、幾つかの領域でさらに明示化・明確化されるようになったことも指摘した。ソルブ語を促進しようとするカトリック・ソルブの教会の言語イデオロギーは基本的に民族語イデオロギーに基づき、民族運動と近い。

と同時に、少数派の民衆語をも尊重するカトリック教会の基本的な言語イデオロギーにも則っており、第二バチカン公会議後の典礼言語改革をも積極的に受容している。その意味で、カトリック・ソルブの教会の言語イデオロギーはこれらの言語イデオロギーを基準として成立しているといえる。しかし、単に民族運動の言語イデオロギーが教会の場で現れたものではなく、言語使用に関するカトリック教会の一般的な原則がソルブ地域にあてはめられたものでもないことが明らかになった。すなわち、カトリック・ソルブの教会の言語イデオロギーは、基準となっている言語イデオロギーの単なる総和ではないのだ。むしろ基準となる言語イデオロギーの融合によって、これらの言語イデオロギーのどちらにも還元できない言語イデオロギー的な新しい次元が生じていることを明らかにした。すなわちカトリック・ソルブ地域の教会の「言語保持神学」は教会の一般的な原則が想定するよりもソルブ語の促進を目指し、民族運動の発想をこえてソルブ語の使用（の拡大）と継承を動機づけているのだ。

最後に、前章で分析した言語使用の堆積と本章で考察した言語イデオロギーをつきあわせることによって、第二部で提起された堆積と言語イデオロギーの相互作用の可能性について検討した。言語使用の堆積と言語イデオロギーの照合を試みる中からその相互関係を仮説的に導き出すことが可能であり、ソルブ語の場合も言語使用と言語イデオロギーが組み合わさって社会的存在としての言語が形成されるさまが推論された。

この推論を言語活動の現場で検証したのが**第7章**だ。本章では一つの教区（教会員が比較的少なく（600人弱）、ソルブ語人口が集住しているヴォトロウ教区）の一定の期間（教会年最大の行事であるとともにソルブにとって「民族的な頂点」とされる復活祭に至る四旬節の期間）を中心にとりあげて、言語使用と言語イデオロギーの具体的なありさまを考察し、ソルブ語使用の堆積のいわば断面図をメタ言語活動と共に描き出すことによって、ソルブ語という言語現象の「人為性」の核心を明らかにすることをめざした。前章までの考察にもとづいて、本章では、表面的には「自然な」日常言語として存続しているかにみえるソルブ語が実相においては教会の意図的な働きかけによってなりたっているという仮説をたてた。そして、教会以外の場と教会の場の言語活動とを対置させることによって教会の言語活動の意味を浮かびあがらせる方法をとった。方法論的重点は言語使用の場の参与観察およびそれに付随する（口頭の）会話におかれ、インタビューやアンケートで調査記録を補った。

まず教区の成立と現状を記し、教区の村々を宗教的、言語的な構成によってカトリック・ソルブの中核、準中核、周辺に分けた。その上で言語活動について検討した。

言語活動についてははじめに言語習得・学習の場として家庭・幼稚園・学校を取り上げて、言語使用の前提となる言語能力の獲得について検討した。両親がソルブ語話者である場合は家庭で主にソルブ語が使用されるが、どちらか一方がドイツ語話者の場合、ドイツ語のみの使用に傾くこと、ヴォトロウの幼稚園はソルブ語を常用語にすることによって家でソルブ語を話さない家庭の子どもにもソルブ語学習・使用の機会を提供しており、また学校も広くソルブ語学習の機会を与えていることが確認された。しかしB学級は言語使用の場とはならず、幼稚園でソルブ語を覚えた人も学校では話さなくなっていく。B学級の併設はむしろA学級の生徒の間でもドイツ語が

使用されることをもたらす要因になっていることが明らかになった。学校は、ヴォトロウ教区の子どもにとって、言語使用に関する限り、家庭や幼稚園で達成されたソルブ語使用をドイツ語に切り替えさせる意味をも持っているといっていよう。

次に、教区における日常的な言語活動および諸団体の言語活動の特徴について検討した。前章までに考察した言語活動の傾向が実際の場で確認され、例外的事例も含めてさらに特徴づけられた。ソルブ語は、教区の中核の村々でソルブ語話者が圧倒的多数を占めるためにドイツ語話者が居合わせる確率が低いため、かろうじて村内の日常言語としてなりたっているといえる。その中で、民族団体などでソルブ語使用の拡大をめざす活動がみられた。しかしそれらの活動はいずれも、ソルブ語話者のみから構成される場を創り出すことによってなりたち、ドイツ語話者のいる場ではドイツ語になる傾向に対する代替を示すわけではない。その意味で、民族運動の言語活動も、言語活動の現場において順応主義イデオロギーに対抗するものではなく、むしろ順応主義イデオロギーの範囲内でソルブ語使用の場を創出する動きとして捉えることができる。

つづいて、世俗面を含めた共同性の結節点としての教会の位置づけおよびその中心人物としての主任司祭の立場を確認した上で、教区の教会がどのようにソルブ語使用の堆積をもたらしているかを検討した。教会の言語使用の場を、予め定めた言語編成によって行われるミサと、使用言語が明確に規定されていないその他の場合に分けて、それぞれどのように言語活動が行われ、いかなる人々の参加によっていかにしてソルブ語の言語空間が創り出されているか、考察した。教会の使信を伝達する主要な場であるミサについては、言語使用を見たあと、説教などの内容的側面にも目を向けた。

ミサは参加者数からも、「ソルブ」という輪郭が明に暗にたえず描かれるイデオロギー面からも、ソルブ語の言語活動の柱となっている。ミサにおいては、ソルブ語話者がドイツ語使用に統合されるのではなく、逆にドイツ語話者もソルブ語使用に統合される。ミサのソルブ語使用に支えられて、その他の教会の活動でもソルブ語での祈祷や歌唱に参加できることやソルブ語を理解することなど、ソルブ語知識が言語選択の基準となり、言語使用に関して地域社会と正反対の発想がみられる。そして一つ一つの場面におけるソルブ語使用の積み重ねおよびそれによる参加者の統合と排除によって、教会の諸活動においては、最大限のソルブ語使用がもたらされている。表面的な見方では、教会はソルブ語を維持する力としてあげられるが、言語活動に注目することによって、教会がソルブ語母語話者の間でソルブ語を維持するのみならず、ドイツ語話者をも取り込む方向でソルブ語の使用範囲を拡げていく動きを含んでいることが示された。このように、ドイツ語化の方向性の強い地域の中で、教会はソルブ語使用を促す逆ベクトルとして作用しているといえよう。教会の「言語保持神学」がそのまま一般家庭において実効性をもつわけではない。しかし、教会は、ドイツ語話者を含む教会員によって、順応主義イデオロギーの及ばない異空間として認識されている。また幼稚園や民族団体など、教会以外のソルブ語使用まで実際には教会に依拠していることが示された。仮に教会がドイツ語使用基調に転換した場合、あるいは世俗化の進展によって教会の影響力がさらに減退した場合、ドイツ語話者との接触場面では順応主義イデオロギーが遍くゆきわたり、ソルブ語話者のみの地域が存在しない以上、ソルブ語はほぼ完全に私的な領域に後退し、衰微するしかないだろう。

以上の考察から、教会指導者による、また教会での言語活動がソルブ語使用の堆積をたちあげ原動力になっていることが明らかにされた。ソルブ語は所与のものとして意図性なくして持続しているのではなく、さまざまな言語イデオロギーのせめぎあう中で、言語使用者の間に強い基盤を持つ教会（の中心的な人々）がソルブ語使用に肯定的な言語イデオロギーに依拠しており、現場で実際に「逆行的言語取り替え」（reversing language shift）の要素を含む活動を行っていることを支えとしてたえず新たに立ちあげられているのである。

第四部 展望

第8章では、本論文の考察をふまえて、少数言語を言語活動として意義づけなおすとともに、言語の「人為性」に関する理論的枠組みの可能性を展望した。

はじめに言語使用の堆積と言語イデオロギーに関する本論文の両事例の相違点を整理するとともに、その相違点が基本的な共通点の上の相違であることに注意を喚起した。いずれの言語もさまざまな特徴を持つ言語使用の段階的堆積として把握された。そしてそのような言語使用の堆積の形成は、社会的条件によって規定されつつも、社会的条件の直接的な反映ではなく、独自のダイナミズムを持つメタ言語活動（言語イデオロギー）によって媒介されている。所与の条件を基盤にした意識的な働きかけによる（「人為的な」）構築という点において、両言語はむしろ共通するのである。ケルノウ語を「人為」、ソルブ語を「自然」として対置させるのは皮相な見方であることが再確認される。

そして、両言語の相違点と共通点に関する検討から、言語は、天然資源のように予め存在するものを持ってきて使うものではなく、そこに価値を見出すことによって創り出す資源であり、また創り出されることによって価値が見出される資源であるとの見方を提示し、少数言語における言語活動を、地域レベルでの一つの社会的資源を創出する営みとして位置づけた。少数言語は、民族問題あるいは社会運動の文脈でとらえられることが多いが、少数言語を社会現象としてより深く理解するためには、当該言語の使用者たちが社会言語的次元で何を創出し（ようと）しているか、そしてその社会言語的次元がどのような意味を持っているかを検証することが欠かせないことが提起された。言語現象の「人為性」を把握する分析枠組みはそのためにも必要になる。

次に、本研究をふまえて、「人為性」を把握する分析枠組みとして言語使用の堆積および言語イデオロギーという概念をたてる意義と方法論について検討した。言語使用の堆積という概念の基本的な意義は、言語使用の積み重なりによる言語の形成過程が積極的に理論化されることだといえる。言語によって異なることが想定される言語使用の段階構造を把握することは、より詳細な考察の際に具体的な言語使用を位置づけるための有効な前提となるだろう。また言語イデオロギーの概念は、言語使用と社会的条件との関わりを明らかにするとともに、そこに介在する解釈フィルターを示すことによって、「社会」と「言語」の直接的相関性を前提とする見方に修正を迫る。必然的あるいは当然と思われる言語使用や言語観が、実は体系化された一連の想定によって方向づけられている可能性を問うことは、言語使用の持続や推移を考察する際に不可欠な視点だろう。

最後に、このような理論的展望において、言語への意識的な働きかけが明示化されやすい少数言語は、言語使用の堆積過程や言語イデオロギーが露出した、言語活動の「原型」(モデル)として位置づけられることを提起し、本論文の考察を少数言語の文脈をこえた研究につなげていくことを今後の課題としてあげて、本論文は終わる。

本文目次

はじめに

第一部 本論文の視座

第1章 本論文の目的と手順

- 第1節 問題の場と本論文の問い
- 第2節 社会言語学における「人為性」の位置づけ
- 第3節 本論文の目的
- 第4節 手順・方法

第2章 理論的検討

- 第1節 言語的衛生
- 第2節 言語管理
- 第3節 言語イデオロギー
- 第4節 理論的出発点と課題
- 第5節 事例研究の手順

第二部 ケルノウ語の復興

第3章 ケルノウ語使用の堆積と言語イデオロギー

- 第1節 言語復興の概要、先行研究および本研究の方法
- 第2節 ケルノウ語使用の堆積
- 第3節 ケルノウ語のイデオロギー的位置づけ
- 第4節 ケルノウ語における「人為性」

第三部 事例研究

一 カトリック地域のソルブ語

第4章 調査地域の概要、先行研究および本研究の方法

- 第1節 カトリック・ソルブ地域の生成とソルブ語の中核地域化
- 第2節 1945年以降のカトリック・ソルブ地域
- 第3節 教会との結びつきの強さ
- 第4節 先行研究
- 第5節 現地調査

第5章 カトリック地域のソルブ語使用の堆積

- 第1節 本章の課題と方法

第2節	ソルブ語の一体性
第3節	言語習得・学習段階
第4節	日常的な創造的使用段階
第5節	公的な状況的使用
第6節	公的な制度的使用（1）－ 創造的使用
第7節	公的な制度的使用（2）－ 形式的（儀礼的）使用
第8節	象徴的使用
第9節	ソルブ語使用の堆積構造
第6章	価値の競合－ソルブ語をめぐる言語イデオロギー
第1節	本章の課題と方法
第2節	同化による平和－順応の言語イデオロギー
第3節	民族のかなめとしての言語－民族語イデオロギー
第4節	民族的責務としてのソルブ語保持－民族運動の言語イデオロギー
第5節	社会主義のためのソルブ語 －「マルクス・レーニン主義民族政策」とソルブ語
第6節	人権としての少数者保護－統一ドイツのソルブ政策
第7節	ソルブ語保持の神学－宗教化された民族語イデオロギー
第8節	堆積への視点
第7章	言語活動の現場－ヴォトロウ教区の例
第1節	本章の課題
第2節	現地調査
第3節	ヴォトロウ教区の成立と教区の主要な村の概要
第4節	家庭での言語習得・使用
第5節	幼稚園
第6節	学校
第7節	日常的使用
第8節	団体・組織
第9節	書かれたソルブ語
第10節	教会員と教会
第11節	司祭の地位とイデオロギー
第12節	ミサ
第13節	ミサ以外の教会行事
第14節	ソルブ語使用の原動力としての教会
第四部	展望
第8章	新たな理論化に向けて
第1節	言語活動による「資源」の創出
第2節	「人為性」の理論的位置づけについての展望

注
文献
資料